

短期滞在学習者のためのコース改善と教材開発

- 体験につながる学習を目指して -

The improvement of the course design and the development of teaching materials for short term learners

- Aiming at the learning led to an experience

大山シアノ・齋藤仁志 (カイ日本語スクール)

Shiano Oyama, Hitoshi Saito

Kai Japanese Language School

要 旨

当校では2006年1月より「毎月開講コース」というコース期間が3週間の短期日本語プログラムを開講している。(以後本コースと称す。)ここでは平均4~5名の受講者が3週間月曜日から金曜日までの5日間、毎日3時間の授業を受講している。受講者は仕事の長期休暇や学校の休みなどを利用して来日した人や、仕事や婚姻などの理由で日本に暮らしている人などが多い。

2007年1月に開講1年目を迎え、改めて本コース全体の振り返りを行い、改善点を探ることにした。この振り返りを通して、開講当初私達が想定していた受講対象者と実際に受講を希望してきた人との間に違いが見られた。また毎回コース終了時に実施してきた学習者へのアンケートや、個別の聴き取り調査などから学習者のニーズもより明確になった。この振り返りを生かすため、校内で新たにチームを立ち上げ、コースの改善と新教材の開発を手掛けることになった。

本稿は短期学習者のニーズをもとに、よりそれに近づいたコース作りと教材開発に取り組んだ実践研究報告である。

Our school has a short term Japanese program, which we call Open Monthly Courses in our school. In this course we provide basic Japanese and daily conversations for 3 hours per a day during 3 weeks. When it passed one year since we started it, we decided to look back on the entire course and to investigate a refinement of the course. Through this reconsidering, we realized that there was a difference between the tendency of the learners of the course and our estimate that we made about what type of people would take the course. In addition, the needs of the learners became clearer from the questionnaires and individual hearing investigations which we carried out in every final day of the course. We tried dealing with the improvement of the course design and the development of teaching materials to make use of this reconsidering.

【キーワード】 短期滞在学習者, コースデザイン, シラバスデザイン, 教材開発, 体験,
場面達成型

1 コース概要

前述のとおり、本コースは1日3時間で3週間、計45時間の短期日本語コースである。(なお、2007年1月より、コース期間をさらに1週間延長し4週間のコースに拡大している。)本コースの受講対象者は入門期の学習者で、国籍、母語、年齢とも多岐にわたる。約半数が日本語学習のために来日しコース終了後帰国していく短期滞在学習者である。その他に仕事や婚姻などの理由で来日した人や、すでに長く日本に滞在している年配者なども受講している。クラス規模は平均4~5名の小グループ制である。授業は2~3名の複数の教師が担当するチームティーチングのスタイルをとっており、日本語のみの直接法で授業を行なっている。教材は当校の教材開発を担当するメンバーで

作成した1日完結型のオリジナル教材を使用している。

2007年1月に開講1年目を迎え、改めて本コース全体の振り返りを行ない、改善点を探ることにした。なお、今回のコースの振り返りおよび改善に携わったメンバーは、本コースの授業を直接担当している執筆者の2名と、当校で教材開発を担当している他の2名の計4名である。

2 コースについての疑問点

当初、「毎月開講コース」をスタートさせるにあたり、受講を希望する学習者について想定した際、私達は以下のように考えた。当校が開講している1日4時間3ヶ月1タームの総合コースをあえて選択しないということは、おそらく日本語に興味はあるが、そこまでじっくり勉強する予定がない、もしくはその時間がない、という学習者が多いのではないかと。そして、日本語学習がどんなものかちょっと体験してみたい、という思いがあるのではないかと。そのような受講者を想定し、本コースは、日本語の基礎文法を紹介しながら生活で使える表現を学んでもらい運用練習を行なうというコースデザインをし、シラバスを立てた。

本コースが開講し1年を迎える頃、受講する学習者の傾向も徐々に明確になってきた。彼らの半数以上は、本コースを受講するために1ヶ月という短い期間来日し、コースが終了すると帰国していく短期滞在学習者であった。本コースが当初想定した、学習者に日本語の基礎を学んでもらうという枠組みが、本当にこのような短期滞在学習者にふさわしいのか、という疑問が私たちの中に浮かび上がった。そこで、これまで毎回コース終了時に学習者に実施してきたアンケートの内容を改めて見直し、学習者の声をまとめてみることにした。

3 学習者からのフィードバックとニーズ調査

まずコース全体の感想として、概ね「満足」という回答だった。その主な理由としては「新しいことを学べた」「日本語が分かるようになった」「コースの内容が面白かった」などであった。「コース内容に学習の必要性を感じられないものがあるか」という質問に対して、「ある」という回答は少なく「どれも便利な表現だ」という答えが多かった。一方で「このコースで学んだことを実際の生活のなかで使ったか」という質問に対して、「あまり使う機会がなかった」と答える学習者が多かった。

以上のようなフィードバックから、本コースで採用している「基礎文法を使っての簡単な生活日本語」というものが、彼らの日本での生活に実際に機能しているのか、という新たな疑問が浮かんできた。そこで本コースを受講している学習者に直接聴き取り調査を行なうことにした。対象は2007年1月から3月の間にコースを受講した学習者9名である。聴き取り調査は主に以下の点についてインタビュー形式で実施した。

1. 日本滞在中に日本語をどのように使っているか。
2. 学習したことが日本での生活に結びついているか。
3. どこで日本語を使いたいと感じているか。
4. 日本滞在中どのような生活環境にあり、普段どのように過ごしているか。

その結果として以下のような点が明らかになった。まず学習者の生活環境についてであるが、短期滞在者の多くが外国人向けのゲストハウスに滞在していることが分かった。そのほか知人の家庭に滞在しているケースも多く見られた。

彼らの日本語使用の機会について尋ねてみると、その多くが日本での生活のなかで日本語を使用する機会があまりない、ということであった。ゲストハウスでは英語やその他の言語が通じる環境にあり、同じ宿泊者も外国人である。知人の家庭に滞在している学習者の場合は、積極的に日本語を話そうとする学習者もあれば、他の言語でほとんどのコミュニケーションを取っている学習者もあった。

また普段どのような生活をしているのかについては、本コース受講以外の時間の使い方などについて質問した。主に授業以外の時間を観光や趣味に関連したことに使っていることが分かった。彼らが訪れる東京近辺の観光地や娯

楽施設では、そこに行くまでの交通機関も含めて日本語使用がどうしても必要となるような場面にほとんど出会うことがないと、学習者の多くが答えた。このような生活環境にいる学習者は、日本に滞在してはいるものの日本語を使用する機会は教室内に止まっており、教室で学んだ表現を外で使用する機会がとても少ないという事実が明らかになった。

さらに、彼らが日本語の使用に対して、どのように感じているのかについても、幾つか分かってきた。以下にその内容をまとめてみた。

1. 東京での生活には必ずしも日本語が必要というわけではない。使わなくても生活面で困らない。
2. 日本語を使う機会は教室内がほとんどで、教室で話せるようになったことを外で使う機会があまりない。
3. 外で聞こえてくる日本語は理解できるものが少ない。分かる日本語に出会わない。
4. 日本語が話せなくても何とかなるが、話せたらいいなと感じる場面はたくさんある。
5. 日本で積極的にコミュニケーションをし、楽しい体験をいろいろしてみたい。

4 改善点の明確化

これまでのアンケートや個別の聴き取り調査の結果をもとに、私達は本コースの主な受講者である短期滞在学習者に対して本コースが提供しているシラバスや教材が本当に適しているかという視点で、改めてその内容を検討してみた。そして幾つかの改善点を見出すことができた。

彼らは日本語を学ぶ目的で、本国での仕事や学校の休みを利用して、はるばる日本にやって来たわけである。彼らがわざわざ日本に来て日本語を学ぶ意義とは何なのか。この点で私達はこれまでのコース内容を大きく見直す必要性を感じた。私達は本コースで学ぶ学習者に何を提供できるのか。単なる日本語入門コースなら自国で学習することも可能である。せっかく彼らが日本に来て日本語を学習するのであれば、彼らの学習を日本での体験につなげていくコースを目指してはどうか。学習と体験を通して学習者の日本語習得の支援ができれば、本コースが学習者にひとつの意義を与えることができるのではないかと考えるに至った。

それでは、どうしてそれが今のシラバスではできていないのか。その点で私達は議論を重ね以下のような改善点を得た。

1. 基礎文法を積み上げながら表現を増やしていくというシラバスでは、1ヶ月という短期間で紹介できる表現に限界があり、実際の場面で使えるまでには至っていない。
2. たとえ場面で使える表現を一言紹介できたとしても、場面全体を達成できる一連の言語行動を日本語で提示しなければ、学習者が実際にその場面を日本語で挑戦しようという気持ちにはなりにくいのではないか。
3. 私達が提示している生活日本語と、学習者が必要としている生活日本語とに開きがあった。彼らの生活スタイルや求めている日本での体験を教材に取り入れるべきだ。

以上のような改善点を見出し、それを実践していくにあたり、私達は最終的に今までのコースを改変し、学習者が教室で学んだことを外での体験に積極的につなげていける新しいコースづくりに取り組むこととなった。また使用していた教材もコースデザインの改善と合わせ新しく開発する決意をした。そして聴き取り調査を通して得られた学習者の日本での生活スタイルや、彼らが体験したいと感じている場面などを新しい教材に積極的に盛り込んでいくこととした。

5 新コースデザイン

私達はチーム内で検討を重ね、新しく提供する「毎月開講コース」のコースデザインの方針を以下のように決定した。

1. 本コースのコンセプトを「東京体験」とした。これは「東京の街を歩いて、自分の方からちょっとしたやり取りができるようになる」ということを意味している。常にそのコンセプトを意識した教材内容、教室活動を考えることにした。
2. 本コースの目標を「体験につながる学習」とした。学習者がその日の学習を終えた段階で、学んだことをそのまま外で試せる状態になっていることを最終的な目標とした。
3. 本コースで用いるシラバスは「場面達成型」で組み立てることとし、今までの「文法積み上げ型」の概念をできる限り取り払うこととした。
4. 本コースの期間は今まで3週間であったが、さらに1週間延長し、4週間のコースとした。4週目には、「楽しい経験がしたい」という学習者からの声に答え、待ち歩きなどのアクティビティーや以前から行っていた日本人とのフリートークなどを組み入れ、実際に日本人とのコミュニケーションを体験する場をコースの中にも取り入れることとした。

6 新教材開発の骨子

上記の新たなコースデザインを踏まえ、教材開発に関しては以下の6項目を開発の骨子としてシラバスを組み立てることとした。

1. 学習者の生活を意識した場面を取り扱う。
2. 教室内での活動が教室外での活動を刺激し、日本語で話してみようというチャレンジにつながるような場面を設定する。
3. 4週間のコースのうち各週4日間は「場面達成型」でシラバスを組み、5日目は文法的な視点から1週間の復習をする時間とする。
4. コースに沿った音声教材を作成する。分かる日本語を耳にする機会を多くする
5. 授業活動の一環に体験型学習を取り入れる。
日本人ゲストとのフリートーク/ウィンドウショッピング/近隣の公共施設への訪問など
実際の体験も授業の中に取り入れる。
6. 日本での生活で学習したことを実際に使ったかどうかを、本コースのひとつの評価基準とする。

7 教材開発の工程

上記の6項目を開発の骨子として新教材の作成に取りかかった。作業工程はおもに以下の6段階に分けられる。

1. 場面の洗い出し
2. 各場面で達成目標となる言語行動の洗い出し
3. 表現・語彙の洗い出し
4. ダイアログの作成
5. 各表現項目の学習方法についての検討
6. 編集と修正

まず上記1.の「場面の洗い出し」では、学習者へのインタビューや外国人向けの生活情報誌、ガイドブックなどを参考にしながら、「学習者がどんな場面で日本語を使用したいと感じているか」、または「どんな体験をしたいと望んでいるか」などを検討し、想定できる場面を取り出していった。「ファーストフード店での注文」「芸術鑑賞のチケット購入」などおよそ20の場面を設定した。

次に2.の「各場面で達成目標となる言語行動の洗い出し」では、それぞれの場面において来日して日の浅い学習者がまず達成したいと感じる言語行動は何かを検討し、優先順位をつけていった。例えば「買い物をする」という場面

で必要となる言語行動としては、「欲しい商品あるかどうか聞く」、「試着の許可を得る」、「商品の感想を言う」、「色やサイズの変更を依頼する」、「支払方法を尋ねる」、「買わない意志を伝える」などを設定した。その他「商品の違いについて尋ねる」、「バリエーションについて尋ねる」、「お薦め商品を聞き出す」、「商品の詳しい説明を求める」などの言語行動も挙げたが、優先度を検討した上で、ここでは取り扱わないという判断をした。

その後、3.の「表現・語彙の洗い出し」では、その場面を達成するために必要となる表現や語彙を挙げていった。ここがこれまでのシラバスデザインと大きく異なる点である。提示する文法項目や文型から表現を探すのではなく、まずその場面のなかで目的を達成するための一連の言語行動があり、そのために必要となる表現や語彙を洗い出していくのである。そしてレベルや既習項目を考慮しながら、洗い出した表現や語彙を吟味し選び出していくのである。

例えば「路上で道に迷った時、人に道を尋ねる」という場面を設定した際、学習者はこれを達成するために、どんな行動をとるだろうか。おそらく初めての場所に行く場合、すでに地図などで目的地を調べた上でそこに向かっているであろう。実際に地図などを携帯して歩いている場合が多いのではないだろうか。しかし本当にこの道で良いのか、どうも自信がない、若しくはどこかで道を間違えてしまったようだと感じることもある。そんな時学習者は近くの日本人に助けを求めたくなるのではないだろうか。

その状況で学習者はどんな言語行動を必要とするか。まず、「通りがかりの人を上手く呼び止めたい」、「困っていることを示し、助けを求めたい」などの言語行動を想定した。そしてそれに必要な表現として私達が選んだのは「あの、すみません。都庁に行きたいんですが...」という文である。次にこの行動によって日本人はどのような反応に出るかを想定する。「ちょっと、わかりませんね。」と断られる。「ああ、ここをまっすぐ行って次の交差点を右ですよ。」と教えてもらう。その他ベラベラとまくし立てる人もいられるかもしれない。この状況を切り抜けるために学習者に必要な言語行動とは何か。断られたら「あ、分かりました。すみません」と一言添える。また道案内の基本的な語彙や表現を理解し、ポイントを掴める程度にしておく。尋ねてはみたものの、相手の言葉が全く理解できない場合は「すみません。日本語がよく分かりません。」と伝える。そして次の行動として考えられるものは、とりあえず現在地が目的地に近いかどうかだけ確認する。または持っている地図で現在地を示してもらう。そのために必要な表現として「都庁は近いですか」、または地図を示して「ここはどこですか」などを想定した。

以上のように「場面」「目標言語行動」「表現・語彙」を設定した上で、次の段階である4.「ダイアログの作成」にあたった。ここでは、設定した一連の言語行動に沿って場面を達成できるような会話文を作成した。一日の授業を終えた段階でこの一連の会話がスムーズに行なえることが、その日の目標となる構成とした。

次に5.「各表現項目の学習方法についての検討」では、取り扱った表現や語彙をそれぞれどう導入し、運用へと導くかを検討していった。その際特に留意したのは、あくまでもその場面での言語行動が達成できるようにするための導入であり、運用練習でなければならない、という点であった。作業は各メンバーが分担して行ない、定期的に内容を議論し合い修正を加えながら進めた。この間メンバーで試行錯誤を繰り返しながら約2ヶ月をかけ完成に至った。

8 新コース開講にあたって

以上の工程を経て、2007年3月より新たな「毎月開講コース」をスタートさせた。新コース開講にあたって、授業担当講師と教材開発担当者などが集まり、コースの目標や進め方、また教材の扱い方や授業の進め方などについて話し合いを持ち、共通認識を確認し合った。

また、講師にも学習者にも、その日の目標がはっきりと分かるよう、各場面で目標とする言語行動を一覧にしてまとめた「CAN-DOチェックシート」を作成し、授業の道しるべとして利用してもらうこととした。

例えば先ほどの道を聞く場面でのCAN-DO項目は以下ようになる。

1. 見知らぬ人に道を聞くことができる。
2. 道順の指示に対して大まかに理解できる。
3. 目的地が現在地から近いかどうか聞くことができる。
4. 日本語がよく分からないことを伝えることができる。

5. 地図を示しながら現在地を確認することができる。

9 新コース開講後の学生からの評価

2007年3月期から新コースがスタートし、現在8タームが終了した段階である。学習者が本コースで学んだ表現をどの程度体験につなげたかを知るために、各学生にそれぞれのCAN-DO項目に対して、教室外での使用の有無について質問した。平均で50%の項目を実際に外で使ったという回答を得た。これは私達が目指した「体験につながる学習」の点で効果が現れたことを示している。このような結果が得られた背景には、学習者の生活スタイルを反映させて場面を選んだこと、または場面と表現が直結しているために、経験に結びつけやすかったということも言えるだろう。また目的達成のために最初から最後までの一連の言語行動を学ぶことで学習者が安心感と自信をもって体験に挑戦できたということも考えられる。

新コース開講後気づいたこととして、本コースのコンセプトや目標が学習者に十分に伝わっていないのではないかという点があった。学習によってできるようになった言語行動を、教室外で積極的に体験につなげるという意識付けを学習者自身に、もっと明確に示すことが必要ではないかと感じた。そこで新たに自己評価表を作成し毎回授業開始時にCAN-DO項目をチェックしながらその日の目標を確認し、各週の最終日に各課のCAN-DO項目がどの程度使えるようになったかを自己評価する活動を加えた。その結果、積極的に経験につなげようとする学生の割合が増加した。このように「コースのコンセプトを意識付けること」、「明確に目標を示すこと」、「頻繁に自己評価を行うこと」などが、学習者自身の「学習目的の明確化」と「学習意欲の向上」に効果をもたらしたのではないかと考える。

学習者の本コース全体に対するアンケートの結果からは、「とても便利で使える表現を学べた」とする評価が多かった。しかし「もっと文法を勉強したい」という旧コースでは見られなかった意見も聞かれた。この点に関しては以下の「教師の評価」と合わせ、「今後の課題」の箇所述べてみたい。

10 担当講師からの評価

これまでの授業の様子について担当教師からの報告を参考にすると、良い点として挙げられた項目は以下のようなものがある。

1. 1回ごとに目標がはっきりと挙げられているので授業を進めやすくなった。
2. 場面達成を意識した導入や練習になっているので、それぞれの表現をいつどこで使うが分かりやすくなった。
3. 「体験につながる学習」というコースの目標を学生達が達成しているので嬉しく感じる。
学習者から学習したことを実際に外で体験してきたという報告がある。
例えば、「ファーストフードで注文をする」、「買い物で店員とやり取りをする」など。
4. 音声教材を授業で有効に使うことで、学生の発話がスムーズになり、また聴き取る力も向上した。

一方問題点としては、このような声があった。

1. 文法的な扱いが複雑な表現も、段階を経ず登場するので、表現意図や文法構造をうまく提示できない場合がある。
2. どこまでの運用能力を目指したらいいのか分からない。
3. 文法的な理解が足りないまま進むのが不安。
4. わざわざ難しい表現を出すより、もっと基本的な表現で代用可能なのではないか。
例えば、「～したいんですけど、できません」、「～してもらえませんか」など。

私達は担当講師とともに定期的に話し合いを行ない、授業の振り返りや疑問点などを出し合い、その都度対応策を検討してきた。必要によっては練習問題を変更したり、文型提示に工夫を加えたりした。しかしそこで特に留意した点

は、学習者にとってより良い改善であって、教えやすさのための改善になってはならないという点である。そこを逸脱して内容を変更していくと、学習者のニーズからどんどん離れていく結果に陥るからである。

11 今後の課題

「毎月開講コース」1年目の節目に行なった振り返りが、最終的にはコース刷新という大きなプロジェクトへと進んだ。今まであったものをあえて捨て去り新しく作り上げていくことは、大きな労力と時間、そして何よりも発想の転換や想像力が求められる。今回の実践も議論を重ね試行錯誤を繰り返し時間と労力を費やす作業であった。しかし新コースが学習者から評価を得ている点で私達自身も大きな達成感を得ることができた。

私達は一時の達成感に浸りながらも、「これが最善」という実践は存在せず、現段階もなお「最善に近づく」ためのひとつのステップに過ぎないことを実感している。私達は今に甘んじることなく、常に振り返りと改善のために労力を惜しまず取り組むことが大切であると考えます。

先に挙げた、新コースの新たな問題点について考えてみたい。場面重視の教材に起こりがちな文法理解の不十分さや汎用性のある運用能力の弱さなどの点を、どのように克服できるかについてである。この点に関して文法シラバスと場面シラバスは相反する面を持っている。特に本コースのような短期という時間的な制約がある場合、何に時間を使うかということが、とても大きな問題となる。文法理解や運用能力を求めれば、場面で現れる表現に出会うまでに何ヶ月も待たなければならない。

当初この点に関して一挙両得は起こりえないという観点で、あくまでもここでは場面達成を第一目標に進めていこうと考えた。しかし授業を担当するなかで、学習者はたとえ場面の状況が良く分かって、表現意図も完全に理解できて、文法的裏づけがある表現とない表現とでは、運用力と記憶の維持に差が現れるということが分かってきた。言葉を学ぶ上で文法的カテゴリーや構造認識は理解のひとつの有効な手がかりとなり、記憶の維持にもつながる。私達が次に取り組むべき点は、どのような方法でこの時間的制約のある「場面達成型」のシラバスのなかに文法的な要素を取り入れていくかということである。この点に関して私達は議論を始めたところである。今後も学習者のニーズにより近づいた日本語習得により有効なコースを目指して次の課題に取り組んでいきたいと考えている。

参考文献

- 奥沢澄子他 (1996) 「日本語 - 」 カイ日本語スクール
実践研究プロジェクトチーム (2001) 「実践研究の手引き」 財団法人日本語教育振興協会
「多文化共生マガジン J-Life」 株式会社アルク
Jan Dodd and Simon Richmond (2005) “ The Rough Guide to Tokyo”
“J SELECT” 外国人のための月刊英文総合情報誌、株式会社ビジネスワールド
Susan Pompian (2005) “ Tokyo for Free” 講談社インターナショナル株式会社
John Trim, Brian North, Daniel Coste (訳・編) 吉島 茂、大橋理枝 「外国語教育 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠」 “Common European Framework for Reference of Languages” 朝日出版社